

大学発ベンチャー企業のスピノフプロセスにおける促進媒体としての 役割を担うソーシャルキャピタル 日本の大学発ベンチャー企業育成環境からの教訓

おていえの ふらんしす せぶいあ
OTIENO FRANCIS XAVIER

新たな知識経済活動において、大学は特に研究と技術開発の分野において知識のクリエイターやプロデューサーとして中心的な役割を担っている。そして、大学の研究成果を経済的価値に変換するうえで、スピノフ企業は大きな役割を果たしている。そのため、スピノフ企業を成長させることは、知識経済の発展において重要な論点といえよう。

たとえば、日本では日本版バイドール案（産業活力再生特別措置法第 30 条）から始まり、さまざまな政策や法律により、多くの大学発スピノフ企業（以降、スピノフ企業）を成長させるための数多くの種類の支援機関（ブリッジサブシステム）が設立されてきたが、スピノフ企業の成長性には影響が見れていない。先行研究では、スピノフ企業が資源を獲得する際に活用するネットワークと信頼（トラスト）はソーシャルキャピタルとして定義されており、スピノフ企業はソーシャルキャピタルを活用して資源を獲得することで成長することが示されている。また、しかしながら、先行研究では、ソーシャルキャピタルとスピノフ企業の成長性の関係は十分に明らかにされていない面もある。

そこで、本研究ではソーシャルキャピタルとスピノフ企業の成長性の関係性において、ソーシャルキャピタルを活用したスピノフ企業は短期間で資源を獲得でき、短期間で資源を獲得できたスピノフ企業の成長性は、大きな影響があると考え、研究を行う。この考えに基づけば、大学の廻り（環境）にソーシャルキャピタルを整備することで、スピノフ企業の業績を向上させることができる。この考えを検証するために、ソーシャルキャピタルに着目して研究フレームワークを構築してみた。ソーシャルキャピタルは、ネットワークとトラストから構成されるものである。此処におけるネットワークに関しては、個人が直接持っている「インディビデュアルなネットワーク」と第三者（所属する機関）が持っている「インスティテューショナルなネットワーク」が存在する。そこで、インディビデュアルなネットワークを活用するインディビデュアル・ソーシャルキャピタルとインスティテューショナル・ソーシャルキャピタルの 2 種類のソーシャルキャピタルとスピノフ企業の成長性の関係について調査・分析を行った。

アンケート調査の分析結果より、インディビジュアル・ソーシャルキャピタルを活用した企業は資源獲得の期間が短いことが示された。しかしながら、企業の成長性にはインディビジュアル・ソーシャルキャピタルは、影響していなかったことが解明された。他方で、企業の成長性には、インスティテューショナル・ソーシャルキャピタルの活用の有無が影響していた。

この結果より、「スピンオフ企業を成長させるためには、ソーシャルキャピタルの中でも、インスティテューショナル・ソーシャルキャピタルの整備が必要である」という結論を得た。いままでのソーシャルキャピタルに関する研究は、多くの研究がインディビジュアル・ソーシャルキャピタルにしか言及されていなかった。またソーシャルキャピタルを定量的に分析した研究は、まだ余り見うけられない。

本研究の貢献は、ソーシャルキャピタルを定量的に分析するとともに、スピンオフ企業を成長させるための要因として、インスティテューショナル・ソーシャルキャピタルという新たな認識（概念）の活用が大きく影響することを示したことにある。